

『俗語解』の岩瀬本と立正本

氏岡真士・閻小妹

On the Iwase Manuscript and the Rissyō Manuscript of the *Zokugo-kai*

キーワード：俗語解、唐話辞書、沢田一斎、伍石居、森島中良

1.

『俗語解』は江戸時代の唐話辞書だが、語彙数や写本数の豊富さもあって未解明の点が多い。筆者らは「『俗語解』の論点」（『信州大学総合人間科学研究』第13号、2019年）で、先行研究や写本系統の整理や分析を行なった。そして『俗語解』諸本のうち岩瀬本と立正本との類似については、立正本の調査を経てから改めて論じたい旨を述べておいた。いま機会を得て、本稿を草する。

2.

二つの写本のうち岩瀬本は、愛知県の西尾市立図書館岩瀬文庫に蔵される『俗語解』十二冊である。つとに鳥居久靖「明治期における中国俗語辞書について—日本中国語学史稿之三—」（『天理大学学報』第38輯、1962年）は、原本の誤読らしき語に抄写者の注記がある点を評価している。

この注記とは、すなわち岩瀬文庫の「古典籍書誌データベース」*が指摘する森島中良の按語を指すであろう。具体的には「駕坐」（カの部分）や「康熙聯対」（雑劇名色）の項に「中良按ニ」云々とあり、他にも「良」の按語が見えることを指摘している。森島中良（1756～1810）は、桂川甫周の弟で蘭学者であり、また平賀源内の門下で（初代）森羅万象などと称した戯作者でもある。

*[https://trc-](https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11F0/WJJS07U/2321315100/2321315100100010/mp01403600/?Word=%e4%bf%97%e8%aa%9e%e8%a7%a3)

[adeac.trc.co.jp/WJ11F0/WJJS07U/2321315100/2321315100100010/mp01403600/?Word=%e4%bf%97%e8%aa%9e%e8%a7%a3](https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11F0/WJJS07U/2321315100/2321315100100010/mp01403600/?Word=%e4%bf%97%e8%aa%9e%e8%a7%a3)（2019年11月25日最終閲覧）

ただし抄写者については、「古典籍書誌データベース」は岩瀬本に「高取植村文庫」の蔵書印があり大和高取藩主植村家長（1753～1828）の旧蔵書と考えられる点や、文化九年壬申（1812）の「正木維澄写之」「今木政直書之」「都筑忠告写」「石川昌隆写之」といった書写識語がある点から、「或いは高取藩士か」と推測している。従うべきであろう。

いっぽう立正本は、大橋敦「立正大学図書館蔵『俗語解』について—森島中良改編本との比較を中心に—」（『立正大学国語国文』43号、2005年）によって、初めてその存在が指摘された。大橋氏は、立正本には森島中良のものらしき按文が散見されるものの、全六冊とも森島中良の筆跡と異なり森島の蔵書印も無い点や、いっぽうで前半三冊の表紙に「服部方行」と記され、各冊第1丁表に「服話」の蔵書印がある点から、立正本は、浅田宗伯の門人の服部方行（1838～1857）の旧蔵本であったと考証している。ちなみに服部の師の浅田宗伯（1815～

1894) は、筑摩郡栗林村（現松本市島立）出身の将軍家典医であり、のちには宮内省侍医も務めた。

3.

『俗語解』は、原本に最も近いと言われ沢田一斎（1701～1782）撰写の可能性のある国会図書館蔵本（石崎又造『近世日本における支那俗語文学史』清水弘文堂書房、1967年。初出は1940年）以来、市川清流修纂の『雅俗漢語訳解』（玉山堂他、1878年）として公刊されるまで、語彙はイロハ順の配列を基本的に採る。

例外といってよいのが、森島中良の手になる漢字画数引きの改編本である（静嘉堂文庫蔵、『唐話辞書類集』第11集、汲古書院、1974年所収）。ただし完本ではない。岡田袈裟男「森島中良晩年探索—あるいは一文人の言語宇宙—」（『日本文学』1983年1月号）は、森島改編本が未完成だったと説くが、石上敏「森島中良晩年の文事—「俗語解」を中心に—」（無窮会『東洋文化』復刊第71号、1993年）は、それに反論する。

いずれにせよ森島自身は、改編本巻一冒頭の「附言」で、「這書〔ノ原本〕ハ、予ガ友伍石居ガ架蔵ナリ」「原本伊呂波ヲ用テ部ヲ分テリ、然レドモ其音甚正シカラズ、這回画ニ従テ語ヲ集ム」などと記す。ここに見える伍石居なる人物の蔵本を、森島中良がどのように利用して改編作業を進めたかは、当然考える必要がある。そこで大橋論文は立正本の内容を分析し、「立正本は、伍石居本（あるいはその転写本）に中良が書き入れを施していた一本の転写本である可能性が高い」と結論付けている。

大橋氏は続いて「『俗語解』の伝本と『雅俗漢語訳解』—森島中良・太田全斎・蒲阪青荘との関わりから—」（『立正大学国語国文』44号、2006年）を発表し、そのなかで静嘉堂文庫蔵の『俗語解』チ～ク部残本や国会図書館蔵の『俗語彙編』イ～テ部残本にも中良の説が見られるものの立正本とは別系統であろうことを指摘したが、その後は、けっきょく岩瀬本『俗語解』に触れることなく、研究の方向を転じられたようである。

4.

岩瀬本と立正本との類似について、以下具体的に見てゆきたい。

まず森島中良の按語である。試みに岩瀬文庫の「古典籍書誌データベース」が指摘する、岩瀬本『俗語解』の「駕坐」（カの部）と「康熙聯対」（雑劇名色）の項を例に挙げよう。その際、句読点や濁点等を加え、合字等は仮名に改める（以下同じ）。

駕坐：陶冕云、天子ノ出御ナリ、唐制ニ天子所居ヲ衙ト云、出行ヲ駕ト云。
中良按ニ、天子ヲ指テ御駕ト云ヒ、天子ノ御前ヲ駕前、天子ニ見ユルヲ見駕ト云フ。

康熙聯対「日月……脚色」：此意ハ……板ハ拍板ナリ。○中良按ニ、此対、飛虹伝ニ見ユルヲハジメトス。

立正本もほぼ同じ記述で、やはり森島中良の按語がある。

駕坐：陶冕云、天子ノ出御ナリ、唐制ニ天子所居ヲ衛ト云、出行ヲ駕ト云。中良按ニ、天子ヲ指テ御駕ト云ヒ、天子ノ御前ヲ駕前、天子ニ見ルヲ見駕ト云フ。

康熙聯対「日月……脚色」：此意ハ……板ハ拍板ナリ。中良按ニ、此対、飛虹伝ニ見ユルヲハジメトス。

また大橋氏が「立正大学図書館蔵『俗語解』について一森島中良改編本との比較を中心に一」冒頭に挙げる立正本の例（シの部）だが、

神明会：マヅ此方ニテ祭礼ト云モノ、中華ニテハ会ト云、諸人相会集スル義ヲ取ト梁蛻岩云リ。中良云、又神会トモ云フ、我邦ニテ祇園会トモニテ見ル可シ。

岩瀬本もほぼ同じ記述で、やはり森島中良の按語がある。ただしこの例では、岩瀬本の誤字がやや目立つ。

神明会：マヅ此方ニテ茶礼ト云モノ、中華ニテハ会ト云、諸人相令集スル義ヲ取ト梁悦岩云リ。中良云、又神会トモ云テ、我邦ニテ祇園令トモニテ見ル可シ。

こうした森島中良の按語は、岩瀬本・立正本全体では以下の30項の語釈に計31条が見え、いずれも両本はほぼ同じ文言である。

遺差・報君知・辟面・学舌・降々地×2・駕坐・唐突・妥貼・早晚・麻核桃・月台・扶手匣・湖山・勾当・阿呀・強似・去・詩堂・神明会・受用・拽扎起・賓白・賓鍔刀・百靈百驗・匹力撲六・弥天大罪・毛紙・蒙汗藥・生路・康熙聯対

下線部の按語は、岩瀬文庫の「古典籍書誌データベース」や大橋氏の二つの論文ですでに紹介されている。なお「降々地」に付されたもうひとつの按語は「良云降御香一炷ト云文此上ニアリ」であり、「此」は『水滸伝（陶冕『忠義水滸伝解』）』からの引用文を指す。

5.

大橋氏の「立正大学図書館蔵『俗語解』」について一森島中良改編本との比較を中心に「一」は、立正本の語彙数をイロハ順に挙げている。ここでは岩瀬本と比較しつつ、改めて数えておこう。

立正本第1冊、岩瀬本第1・2冊

イ 376 (岩瀬本は「一件」「一串」「一齣」の重出分や「一比」が無いが、「以次人丁」があり、373。)

* 配列など両者の相違が目立つ。

ロ 67 (岩瀬本同。立正本の「漏風掌」云々は眉批に見えるが、書き洩らしの補記であろう。)

ハ 571 (岩瀬本同。)

ニ 15 (岩瀬本同。)

ホ 203 (岩瀬本は「報効」があり、204。)

へ 137 (岩瀬本は「劈■【片の左右反転形】」が無く、136。)

ト 279 (岩瀬本は「贛心」が無く、278。)

立正本第2冊、岩瀬本第3・4冊

チ 268 (岩瀬本は「呢」「寫遞𨔵𨔵」があり、270。)

リ 170 (岩瀬本同。)

ヌ 8 (岩瀬本同。)

ル 12 (岩瀬本は「搗」があり、13。)

ヲ 60 (岩瀬本同。)

ワ 40 (岩瀬本同。)

カ 806 (立正本は「篙師」が重複するが、岩瀬本は最初の「篙師」が無く、805。)

立正本第3冊、岩瀬本第5・6冊

ヨ 63 (岩瀬本同。)

タ 578 (岩瀬本は「打醋炭」「断」が無いが「大家」「台頭」があり、578。)

* 「唾罵」～「泰水」の半丁の位置が異なる。

レ 86 (岩瀬本同。)

* 最後の一つは「当三錢」 (!)

ソ 264 (岩瀬本は「怎樣」「癩子」があり、266。)

ツ 8 (岩瀬本同。)

ネ 30 (岩瀬本同。)

ナ 54 (岩瀬本は「禰」があり、55。)

ラ 184 (岩瀬本同。)

- ム 15 (岩瀬本同。)
 ウ 24 (岩瀬本同。)
 (キは無し。)
 ノ 11 (岩瀬本同。)
 (オは無し。)
 ク 513 (岩瀬本は「創者」「勸」が無く、511。)

立正本第4冊、岩瀬本第7・8冊

- ヤ 33 (岩瀬本同。)
 マ 70 (岩瀬本同。)
 ケ 319 (岩瀬本は「郷党」「郷貫」が無く、317。)
 フ 282 (岩瀬本は「不分」があり、283。)
 コ 371 (立正本は「勾情」が語釈のみで見出しが無い。岩瀬本は「胡瓜」が無いが、「綱」があり、372。)
 (エは無し。)
 テ 310 (岩瀬本は「頂」があり、311。)

立正本第5冊、岩瀬本第9・10冊

- ア 117 (岩瀬本同。)
 サ 424 (立正本は「傻郎」が重出。岩瀬本423。)
 キ 516 (立正本は「窮鬼」が重出。岩瀬本は「喜状」「饒」が無いうえ、「喫」は語釈のみで見出しが無く、512。)
 ユ 48 (岩瀬本同。)
 メ 49 (岩瀬本同。)
 ミ 10 (岩瀬本同。)
 シ 1166 (岩瀬本は「紙虎」「紫菜」「刺瞎」「紙燃照法」「事由」「絮被」「親切」「招帖」「商確[△]」「商儀」「商量」「掌班」「収科」「擱」が無いが、「刺字匠」があり、1153。)

* 語彙数で両者の相違が目立つ。

立正本第6冊、岩瀬本第11・12冊

- エ 95 (岩瀬本同。)
 ヒ 150 (岩瀬本は「肥象」が無いが、「咎」「儂相」があり、151。)
 モ 59 (岩瀬本は「木驢」が無く、58。)
 セ 341 (岩瀬本は「青目」が無く、340。)
 ス 14 (岩瀬本同。)
 (以下「附録」)

雑劇名色 163 (岩瀬本同。)

*ちなみに国会本は「下場」「落台」が無いが、「鼓門道」「楔子」「正韻」があり、164。

娼妓名色 187 (岩瀬本同。)

*国会本は「假母」「虔婆」「老媽兒」「波麼」「外婆」「擷丁」「忘八」「烏龜」「冤家」「三板」「顧老」「孤老」「嫖客」「招夫」「鬪客」「多鈔才郎」「姐夫」「綿團」「子弟」「十母」「串門子」「驀寡門」「地虎」と「白眉神」とが無いが、「名娼」「私娼」「土妓」「老三板」があり、167。

金陵六院市語 108 (岩瀬本同。)

*国会本同。

開風名色 78 (岩瀬本同。)

*国会本は開を閨に作る。「卯脬」が無く77。なお「敖曹」も語釈のみあって見出し語が無い。

顔色差別 116 (岩瀬本同。)

*国会本は語群を東西南北に四大別するが、「大黃」が無く115。なお「石藍」も語釈のみあって見出し語が無い。

以上を概観しても、立正本と岩瀬本との類似は窺えるであろう。

さて大橋論文は立正本イ～スの語彙総数を9153語(付録も含めれば9806語)と算出したうえで、国会本の8566語(村上雅孝「『俗語解』小考」、加藤正信編『日本語の歴史地理構造』明治書院、1997年)や長沢本(『唐話辞書類集』第10・11集、汲古書院、1972・1974年)の約8400語との異同の実態を、<夕の部>に即して調査している。そして国会本と長沢本の類似に比して立正本は相違が大きいこと、特に「立正本にのみ掲出する見出し語」が47語あり、そのうちの19語のように「立正本の各部の最後の一、二丁には、沢田本〔=国会本〕、長沢本に見られない漢字一字の注解のない見出し語が掲出されている」ことが指摘されている。

その後、大橋論文では立正本と森島中良改編本との比較から伍石居本との関係を探る試みが行われるが、この問題については別稿に譲りたい。というのも前述した大橋氏のもう一つの論文(『立正大学国語国文』44号、2006年)によれば、森島中良の説は静嘉堂文庫蔵の『俗語解』チ～ク部残本や国会図書館蔵の『俗語彙編』イ～テ部残本にも見られ、これらは太田全齋や蒲阪青荘の説を記すという静嘉堂文庫蔵の『俗語解』イ～ト部・「附録」残本ともども、更なる検討を要するからである。

同様のことは、岩瀬本に即して言えば逃は<トの部>第10丁表、挑は<チの部>第6丁表（および<テの部>第12丁表）、逃は<チの部>第10丁裏と<テの部>第12丁表、呷は<ヌの部>第1丁表、■【才奴】も<ヌの部>第1丁表、煖は<ク
の部>第17丁裏、濯は<ヤの部>第2丁表、賺は<ケの部>第3丁裏、滯は<テの
部>第10丁表、替は<サの部>第5丁裏、斲は<キの部>第21丁表、鬧は<キの
部>第21丁表、拖は<シの部>第3丁裏、撐は<シの部>第33丁裏（撐は<シの
部>第33丁表）、褶は<シの部>第39丁表、摺も<シの部>第39丁表、擲も<シ
の部>第39丁表にそれぞれ見られる。

これらを岩瀬本<タの部>の「漢字一字の注解のない見出し語」に付された語釈
ならざる記述群と見比べれば、後者は当該の見出し語がどの部のどの丁に見える
かを示した、一種の索引のような役割を果たしていると思われる。

なぜそのような「索引」が必要かと言えば、すでにお気づきのように、これら
の見出し語は<タの部>にあるべきだという考え方に基づくであろう。字音仮名遣
いも適宜考え合わせれば、濁、逃（タウ）、挑（挑達の場合にタウ）、逃（タ
ウ）、呷（ダウ）、煖、濯、賺（タン）、滯、替、斲（タク）、鬧（ダウ）、拖
（タ）、撐・撐（タウ）、擲（ダク）となる。ただし■【才奴】はド（≒努）だ
が、呷から類推して、また褶・摺もセフだが、擲（タフ）との混用および類推に
よって、ここにまとめたものと考えられる。

興味深いのは先ほど保留した、套を親字とする語群で、<イの部>第4丁表を立
正本と比較すると、立正本では套話・套體・套鞋・套數の4語について記す計3
行分が、岩瀬本ではただの空白となっている。この空白もまた<タの部>にあつて
然るべし、という考え方の反映であろう。

ともあれ以上のことから、立正本における<タの部>の「漢字一字の注解のない
見出し語」たちもまた、岩瀬本と同様の考えによって集められていることがわか
る。そして<タの部>に限らず大橋氏が指摘した「立正本の各部の最後の二、三丁
には、沢田本〔=国会本〕、長沢本に見られない漢字一字の注解のない見出し語
が掲出されている」部分は、例証は省くが同じ機能を持っていることが、岩瀬本
との対照によって判明するのである。

ちなみに岩瀬本は、最後のほうに並ぶ「漢字一字の注解のない見出し語」以外
でも、一般に○を新しい親字の上に付し、その音読みが部立てと異なる場合は○
のなかに第一音をカナ書きし、また親字が重出の場合は△を付すなどの工夫がな
されている。なお各丁オモテの柱に見出し語の親字を記す点は、立正本と共通す
る。

7.

念のため確認しておくが、上述の事情にもかかわらず立正本や岩瀬本の語彙数
は、国会本や長沢本より増えていると見て良いであろう。たとえば第5節で引用

したように、大橋論文は<夕の部>において「立正本にのみ掲出する見出し語」が47語あることを指摘していた。そのうち先ほど検討した「漢字一字の注解のない見出し語」の19語を除いても、28語が増加している計算となる。

ところで立正本で套を親字とする語群を記す3行分が、岩瀬本<イの部>第4丁表では空欄になっていることを先に述べた。しかしこの語群は、岩瀬本<イの部>の末尾には記されている。そのことは、立正本と岩瀬本とでは<イの部>において「配列など両者の相違が目立つ」とやはり先に記した点と関わりがある。

岩瀬本<イの部>の末尾(第14丁表～裏)を見てみよう。ただし語釈は略す。なお「納喊」は原文ママである。

套話	套體
套鞋	套數
葺理	囚徒
演撒	演劇
姚	
納悶	納喊
納涼	納降
怡	
喂	一料
穩婆	

これらの語彙は、岩瀬本では「一」を親字とする大量の語群の後に位置するが、立正本の<イの部>ではもっと前のほうに分散して挙がっており、そちらは国会本の配列と類似している。岩瀬本においては、これらの語彙を<イの部>から別の部へ移すべしと考えられたことは、見易い道理である。

立正本と岩瀬本の<イの部>における配列などの相違は、これにとどまらない。たとえば立正本<イの部>の末尾を見てみよう。やはり語釈は略す。

姚	
怡	
喂	一料
又來	
櫛括	
懊懷	一惱
詒騙	

これらは一を親字とする語群で終わる国会本とは異なり、また前半(「喂料」まで)は岩瀬本<イの部>の末尾と重なるものの、後半はむしろ岩瀬本<イの部>の中ほど、「一」を親字とする大量の語群の手前に位置する第6丁表の記述(語釈

は略す)に近く、それらの親字は「イ」で始まると考え得る(「懊」はアウの他にキクの音もある)。

△引子
又來
彙括
懊懐 一惱
詒騙
以次人丁

国会本<イの部>は「引子」のあと、直ちに「一」を親字とする語群となり、それで<イの部>は終わる。それに増補を試みたのが立正本<イの部>の末尾で、そのような<イの部>に音引きの見地から更なる修正を試みつつあるのが岩瀬本と言えるかも知れない。

勿論これは図式化した解釈であって、厳密には立正本や岩瀬本の種本がそうだった可能性もあろう。いずれにせよ立正本と岩瀬本における<イの部>の違いは、単純な脱落または追補が重なったと解しうる<シの部>の相違(第5節参照)とは事情が異なる。

ひとつ確かなことは、立正本も岩瀬本もイロハ順の大枠を守りつつ、個別の部分に対する改良を指向している点である。だがそれは、森島中良が残した画数引き改編本とは方向を異にする。

そうすると立正本や岩瀬本と伍石居本や森島中良との関係については、更なる検討が必要だということになる。そしてそのためには前述のように、森島の按語をもつ別系統とされるテキスト、すなわち大橋氏がその存在を指摘した、静嘉堂文庫蔵『俗語解』チ〜ク部残本や国会図書館蔵『俗語彙編』イ〜テ部残本の検討が欠かせない。あわせて静嘉堂文庫蔵『俗語解』イ〜ト部・「附録」残本も参照を要するであろう。これが今後の課題となる。

*本稿の研究はJSPS 科学研究費補助金 18K00315 および 18K00351 を利用した。

2019年12月9日受理 2020年2月1日採録決定